

刻舟求劍

「週末寸言」原稿 20100619

中国の春秋戦国時代末期（BC3世紀）に完成したと言われる『呂氏春秋』という書物がある。その中の一つに「刻舟求劍」という次のような寓話がある。

話の主人公は楚の国の人。舟で大河を渡っていた時、手に持っていた劍を間違って水中に落としてしまった。彼は、とつさに舟のへりに小刀で印をつけて次のようにのたまった。「是吾劍所從墜」（これが吾が劍のよりて墜ちし所なり）やがて向こう岸に舟が着いたとき、かの男は刻印しておいた箇所を手がかりに水中にダイビング。見つかるわけの無い劍を文字通り「一所懸命」に探したという。文章は、次の成句「求劍若此／不亦惑乎」（劍を求むることかくのごとし。また惑いならずや）で終わっている。

この話、時代の変化に気がつかず、目先の現実しか目に入らない人間の愚しさを戒める教訓として古くから人口に膾炙してきた。しかし、この愚かしさはこの楚の男だけで

はない。現代人たる我らも大して違うことをやっているわけではないのだ。

宇宙天文学の知見によれば、地球が属する銀河系をはじめとする宇宙はビッグ・バン以来ひと時も休まずに膨張を続けていくという。それが証拠に、遠い星が発する光は、ドップラー効果によって波長が長い方にずれている。これを赤方偏移という。

風船の表面2か所に印を付けておいて、この風船を膨らませると、この2点はどんどん離れていく。しかも、これら2点間の距離が遠ければ遠いほど早く遠ざかる。これと同じように、我々の天体から、他の全天体はどんどん遠ざかっている。太陽系から見ると宙の果てにある天体はなんと光の速さに限りなく近い速度で遠ざかっている。

そんなこととはつゆ知らず、我らは今日も昨日も、些事を言い募り、武器をもって争い、この狭い宇宙船地球号のあたり構わず傷を付け回っている。その間にも近隣の宇宙は我らから遙か遠ざかり「今は昔」となっているというのに、である。これぞまさしく「刻舟求劍」。楚国の男を笑う資格など全く無いのである。